

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：10101
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21700838
 研究課題名（和文）アーユルヴェーダ文献・仏教經典を用いた古代インド精神医学史の研究
 研究課題名（英文）A study on history of psychiatry in ancient India

研究代表者
 森口 眞衣（MORIGUCHI MAI）
 北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
 研究者番号：80528240

研究成果の概要（和文）：

- （1）主要アーユルヴェーダ文献の構成を調査し、代表的なインド医学書『スシュルタサンヒター』において「精神医学」関連記述の記載個所を特定した。
- （2）症状記述と具体的な精神障害との関連を精神病理学的に考察し、『スシュルタサンヒター』に記載されている精神障害を特定した。
- （3）仏教經典やダルマ文献などを調査し、精神病患者の言動や精神療法的対応に関する記述が医学書以外の文献にも存在する可能性を確認した。

研究成果の概要（英文）：

This research shows the following three points:

- (1) Within the chief Indian medical text, Susrutasamhita, some passages relating to mental diseases and symptoms were identified.
- (2) Some mental disorders described in Susturasamhita were specified by psychopathological analyses on those descriptions of symptoms.
- (3) In the Buddhist scriptures and the Dharmasastras, there is a possibility that some passages included in the scriptures and thus outside of medical literature refer to cases of mental illnesses and psychotherapies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学社会学・科学技術史，科学社会学・科学技術史

キーワード：アーユルヴェーダ，精神医学史，スシュルタサンヒター

1. 研究開始当初の背景

本研究課題の申請時点で、日本国内・国外における古代インド精神医学史を含めたインド医学に関する研究状況については、下記の通りである。

(1) 日本国内の状況

これまで古代インド精神医学史を含めインド精神医学に関する研究はほとんど行われてこなかった。アーユルヴェーダ文献についてはサンスクリット医学書への文献学的

研究、仏教經典については宗教・哲学的視点による研究が基本であり、精神医学分野を含めた医学的検討は困難となっていた。この背景には医学研究者の考察対象となりうる適切な日本語訳・研究業績の不足があり、翻訳出版は実質的に1970年代のものが最終といえる状況であった。

またそれらを用いた若干の精神医学的考察(小田,1990)が提示されていたが、既出翻訳資料の一部を限定的に用いた分析であり、全体的な解明ではなかった。

(2) 日本国外の状況

海外では20世紀からアーユルヴェーダの代表的医学書を対象とした校訂テキスト・英訳が原典の全文翻訳形式で相次ぎ出版されている。しかしアーユルヴェーダ医学体系は現代の医学大系とは大きく異なり、原典の伝統的構成を踏襲した翻訳から考察対象を抽出し領域特定を行うには困難を有する。

近年になって主要アーユルヴェーダ文献の内容を網羅する業績(Meulenbeld,1990)が提示されたものの、基本的には各文献の内容を原典構成に沿って概説した文献成立史としての成果であり、精神医学のような領域に踏み込んで内容を解明したり、具体的な疾患の記述内容を対象としたりするものではなかった。

(3) 本研究の背景と動機

上記のようにインド医学に関する研究には、文献資料に関する問題と医学大系に関する問題が並立してきた。特にインド精神医学史に関していうならば、そもそも「精神医学」という領域自体が具体的にはインド医学書のどこに記載されているのかさえ明確に特定されていない状況である。そのため個々の疾病を対象として文献学的手法と医学的考察の両側面から行う研究は、現在に至るまで世界的に見てもほとんど未開拓の状況が継続してきた。その背景には両者が本来は異なる研究領域に属していることがあり、両者の境界に新たな研究域を構築する必要がある。

先行研究では伝統的な体系区分を基準に指摘された箇所が精神医学領域であると想定されていたが、研究代表者は文献学的な描写内容の調査に精神病理学的な分析を加えた領域の再検討が必要であると想定した。

2. 研究の目的

前述の状況を踏まえ、本研究は西洋医学の一分野として精神医学が成立する以前から存在した医学体系のひとつである古代インド医学において、現代でいう精神疾患の病理的側面や精神障害者の位置づけといった社会的側面を含め、「精神医学」という領域を特定することを主目的とした。

また仏教經典やダルマ文献などアーユルヴェーダ文献以外の資料も含め、従来のイン

ド医学研究で調査されていない範囲も対象とし、古代インド精神医学史の網羅的解明を目指すことを特徴とする。

同時に研究代表者は、精神医学史にとどまらず、将来的にはインド医学体系に関する、より広範囲の解明を目的とした関連研究への発展を想定している。本研究はその第一段階として、研究代表者が既に萌芽的研究成果を提出していた「精神医学領域」の特定作業を通じ、他領域についても記載箇所特定とその構成・内容解明を進めるために必要な情報・手段を入手するための実験的研究の側面も持っている。

具体的には本研究期間中に以下の点について明らかにすることを計画した。

(1) 病像描写の明確化

主要アーユルヴェーダ文献の内容・構成を調査し、現代精神医学における精神疾患と共通の病像が古代インド医学書ではどこまで把握され、どのように記述されていたのかを抽出する。

(2) 精神医学領域の特定

独自の医学体系に基づいて記述されるインド医学書においては、「精神医学」に関する内容が記載される箇所は具体的にどこなのか完全には解明されていない。記載箇所の特定を通して、インド医学における精神医学領域がどのような病態を対象として成立していたのかを検討する。

(3) 社会精神医学との関連

インド医学書だけでなく、仏教經典やダルマ文献類といった、先行研究ではあまりインド医学研究では用いられていない資料を対象に含める。インドの社会的状況をより詳細に描写する文献の調査により、事例化の問題という視点から、当時のインド社会において精神障害者がどのように位置づけられていたかを検討する。

(4) 精神療法の調査

欧米では現代の精神医療の臨床現場において、インドや仏教に関連した形で成立・発展した精神療法が用いられることも多い。こうした状況の背景を解明するため、インド医学書を含め古代インド社会や仏教教団の生活などに言及する文献を調査し、既存の精神療法の発展や、現段階では未知の精神療法の発見につながるような精神療法関連の記述を調査し、インド医学の新たな発展可能性の検討材料になる成果として提示する。

(5) 医学体系比較の基盤構築

インド医学の基礎となる病因論であり、精神疾患との関連も想定される「ドーシャ説」について、先行研究では現代医学の源流である古代ギリシア医学の「体液説」との構造的類似が指摘されている(Kutumbiah,1969/二宮,1998)。インド医学書の精神医学関連記述では精神症状と「ドーシャ説」の関係につ

いての言及があるが、説明はいまだ十分な状況ではない。この問題へ寄与するため、ドーシャ説と精神障害の関連を対象とした新たな成果の提示をはかる。また古代ギリシア医学との比較作業が包含されることから、新たな研究領域の構築に向けた準備として、古代ギリシア医学・古代中国医学など、他の古典医学との比較を想定した基礎研究としての成果提示に着手する。

3. 研究の方法

本研究は基本的に、インド文献学と精神病理学とに架橋した位置づけを持っている。2 (研究の目的) で示したそれぞれの研究目的について、両方面から作業を展開する計画を立案した。

(1) (2) について：

古代インドにおける医学的視点による臨床像の把握状況を対象とするため、中核文献としては、研究代表者が既に萌芽的研究の形で内容調査に着手していた、アーユルヴェーダの代表的医学書『スシュルタサンヒター』を選定する。ただし従来の研究手法のように伝統的構成に沿う形式で、章立てを基盤とした絞り込みを行うという手法ではない。収録されている症状記述について、文献全体から横断的に抽出し、必要に応じ他の医学書・関連周辺文献を参照しつつ、記述された病像を明確化していく方針を採用した。

上記の作業工程を繰り返し、症状記述の抽出がある程度まとまってきた段階で、描写された内容から、アーユルヴェーダにおいて現代でいう「精神病」がどの程度把握されていたのかを考察し、精神医学領域の特定を行う。特にこの段階では、精神病理学者との検討作業を重ねつつ、医学的視点を大きく取り入れた形の成果として提示する。また、従来の伝統的構成による領域特定とも比較し、より精度の高い検討方法を構築する。

(3) (4) について：

病像そのものの描写より、当時の社会状況の中で「精神障害を持つ者がどのように扱われていたのか」「精神に苦しみを抱えた者がどのように癒しを得ていたのか」という描写の検討が中心になるため、古代インド社会の倫理・規律・社会的対処に関する記述が主要な調査対象となる。そこで初期仏教教団の倫理・生活規範を収録する『律蔵』などの仏教経典に加えて、古代インド社会の法律・社会規範を収録するものとして知られる『マヌスムリティ』を代表とした、いわゆるダルマ文献を中核的文献群として選定する。当時の社会で「逸脱した存在」と見なされた人々を描写する記述とともに、精神の苦痛に対処する実践法(宗教的実践を含む)に関する記述を抽出し、現代社会における対処法との比較を行う。

(5) について：

病因論としての「ドーシャ説」は既に知られているが「ドーシャ」自体の正体や位置づけ・他の病因との関連など、未解明の部分も多い。先行研究ではドーシャ説に対し古代インド思想のひとつ、サーンキヤ学派の哲学概念との関連が文献学領域から提示された。ただし医学的視点による検討については、現在も困難な状況が継続している。そのため将来的な臨床医学分野との研究連携実現に向け、必要な基礎研究成果の提示が急務と考える。前述 (1) (2) の作業により得られた成果の中から (5) と関連するテーマを構築し、順次その検討内容の整理・公表を行う。

4. 研究成果

本研究の遂行により、以下のような研究成果を得た。

(1) 文献学関連での成果

① 従来「憑依病」として位置づけられていた「グラハ」概念の変遷を調査したところ、以下の点が新たに判明した。

(a) 小児と成人で区別されていた

(b) 叙事詩『マハーバーラタ』にも記述されている古いグラハ概念を踏襲したうえで、医学書では詳細な分類を目的として細分化された名称が追加されていた

(c) かつて成人グラハには、別の精神障害との関連が想定される「ウンマーダ」概念が混淆されていたが、医学書では後に区別された可能性がある

② 伝統的構成を基盤にした従来の研究では、『スシュルタサンヒター』における精神医学領域の記載箇所は第6セクションの第60~62章とされてきたが、このほか第1セクション第15章・30章にもまとまった記載があることを確認した。

③ 『スシュルタサンヒター』では第4セクションに相当するが、インド医学書で身体に関する内容を扱う「シャーリーラスターナ」のセクションに「精神の病的状態」に関する言及が含まれることを確認した。ただし別の医学書『チャラカサンヒター』とは内容面で差異があり、発展的な内容となっている。

(2) 精神病理学関連での成果

① 『スシュルタサンヒター』において先行研究で指摘されていた以外の箇所からも精神障害に関する記述を発見・抽出した。

② 『スシュルタサンヒター』の記述では精神症状よりも身体症状に着目する傾向が強く、当時の医師は外面的な表出から病像を捉えていた可能性が高い。

③ 『スシュルタサンヒター』における病像について、うつ病に関しては現在に近い描写を抽出できたが、統合失調症に関しては精神症状の言及に乏しいことから、明確な抽出は困難であった。しかしダルマ文献のひとつ

『ヤージュニャヴァルキヤスメリティ』には統合失調症との関連を想定させる追跡妄想の記述を確認した。

(3) 社会精神医学関連での成果

① アルコールに関連する精神症状について、いわゆる急性アルコール中毒の臨床症状が現代とほぼ同様の形で分類されていることを確認した。

② アルコールに関連する精神症状について、いわゆるアルコール依存としての精神医学的問題は少なくとも医学書においては急性中毒と臨床的に区別されていた可能性があり、その点については医学書よりもむしろダルマ文献において関係記述が多いことを確認した。

(4) 精神療法学関連での成果

① 大乘仏教経典『涅槃経』の阿闍世王説話において、他経典では主に外科医・薬剤師として描写される古代インドの仏教医師「耆婆（ぎば）」が、うつ状態を呈した患者に対して現代の精神療法を連想させる接し方をしており、精神療法家としての側面を描写していることを確認した。

② 初期仏教経典群の阿闍世王説話においては、大乘経典とは異なる形で「罪悪感」への精神療法的対処が提示されていることを確認した。初期経典では内観療法の治療構造・治癒機転に近い説話が採取でき、仏教では「対話」と「内観」の相乗効果に着目する姿勢があった可能性を提示した。

(5) 研究課題の再構築

本研究課題の遂行中、上記2（研究の目的）のうち特に（3）（4）（5）に関連して、研究成果の提示が研究課題名の範囲を越えた形となる可能性が高まってきた。本研究課題は「古代インド」を対象とした精神医学史の研究であったが、当初想定した「古代（～紀元後5世紀ころまで）」以外の時代を対象とする内容、また「インド（広義のインド亜大陸）」を直接には対象としない内容へ踏み込む成果が出始めてきている。

そのため研究代表者は「インド精神医学」に関連しつつ、時代や地域を「古代インド」に限定しない形で研究を展開する必要性を重視し、研究課題の再構築を行った。上記2（研究の目的）のうち（3）（4）に関しては平成24年度より基盤C研究課題として新たに立ち上げ、既に研究を開始している。（5）に関しては本研究期間中に得られた萌芽的成果について、次段階として発展させるための整理作業を進めた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

① 森口真衣、古代インド医学における「精神の病的状態」—「シャーリーラスターナ」を中心に—、印度学仏教学研究、査読有、59巻第2号、2011、258-264

② 森口真衣、古代インド医学における「グラハ（graha）」概念の変遷—医学文献との関係—、印度哲学仏教学、査読有、第25号、2010、58-73

③ 森口真衣・大宮司信、インド古典医書『スシュルタサンヒター（Susrutasamhita）』における精神医学的記述、臨床精神病理、査読有、第30巻第3号、2009、183-202

④ 森口真衣、「王舎城の悲劇」における耆婆の医師像—『涅槃経』梵行品の阿闍世王説話—、印度哲学仏教学、査読有、第24号、2009、109-119

〔学会発表〕（計8件）

① 森口真衣、古代インド社会と精神障害の関連について：「アルコール問題」をめぐる記述から、第62回日本印度学仏教学会、2011、龍谷大学（京都市）

② 森口真衣・大宮司信、初期仏教経典『アーマガマ（阿含）』における精神病理学的記述、第33回日本精神病理・精神療学会、2010、東洋大学（東京都）

③ 森口真衣、古代インド医学書における「シャーリーラスターナ（Sarirasthana）」について、第61回日本印度学仏教学会、2010、立正大学（東京都）

④ 森口真衣・大宮司信、古代インドのダルマ文献における精神病患者、第32回日本精神病理・精神療学会、2009、岩手県民情報交流センター（盛岡市）

⑤ 森口真衣、グラハ（graha）について：『マハーバーラタ』から医学文献へ、第25回北海道印度哲学仏教学会、2009、北海道大学（札幌市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森口 真衣（MORIGUCHI MAI）

北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員

研究者番号：80528240

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし